

## 彙報

### 第一〇回総会および研究集会

木簡学会第一〇回総会と研究集会は一九八八年二月三日、四日の両日にわたって、奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館講堂において、約一五〇名の参加者をえて開催された、会場には、話題をよんだ長屋王宅出土の木簡・東大寺出土の木簡・藤原宮出土の薬物関係の木簡等が展示され、会員の関心をよんだ。

◇二月三日（土）（午後一時―五時）

第一〇回総会（議長 坂本賞三氏）

最初に平野邦雄会長の挨拶があり、つづいて議長を選出して議事に入った。

会務・編集報告（佐藤宗諱委員）

会員数は一二名の新入会員と一名の退会者があり、現在は二三名であること、会務を円滑に進めるために会員外の幹事を依頼するための細則を決定したこと、会員への情報提供として『平城宮発掘調査出土木簡概報』（二十）および『東大寺大仏殿西廻廊隣接地の発掘調査』を七月に郵送したこと、十周年の記念出版の概要、会誌第一〇号の編集経過、ことに木簡出土遺跡一覽等を掲載

したことなどが報告された。

会計報告（岩本次郎委員）

一九八七年度の会計報告が行われ、年度の収支、第一〇号の定価（三八〇〇円 送料四〇〇円）についての説明及び十周年の出版に関する特別予算措置についての説明があり、ひきつづいて田中稔監事から長山泰孝監事と共に監査を行い、会計の執行が正当、適切に行われていることを確認した旨報告があった。

委員・監事の改選

次期（一九八九・九〇年度）委員および監事について、八木充氏より推薦があり、了承された（一六三ページ参照）。

研究集会（司会 原秀三郎氏）

伊豆国堅魚木簡からの展開

橋口尚武氏

長屋王宅の発掘調査

花谷 浩氏

長屋王家木簡の概要

綾村 宏氏

橋口報告は、伊豆半島とその周辺における出土遺物とくに漁撈具と、堅魚を平城宮に貢進した荷札との相関関係を、長年にわたる調査・研究の成果をふまえて明らかにされたもので、考古学の遺跡・遺物とその地方から貢進された租税の荷札との関連から、古代の生産と貢納との具体的様相を復元した貴重なものであった（なお同氏著の『島の考古学』が刊行されている）。

花谷浩氏と綾村宏氏との報告は、平城京左京三条二坊の西北四

坪を占める長屋王邸推定地の発掘結果と長屋王邸と推定される根拠となった同地出土の木簡についての報告である。いずれも調査が継続中であり、中間報告であったため、両氏及び発掘主体の奈良国立文化財研究所には、かなりの無理をおして報告していたものである。今後出土遺物の整理が進行するにしたがって、同遺跡の全体像が明確になると思われるが、学界へのとりあえずの略報として、最新の情報を提供していただいた同研究所と両氏に謝意を表したい。また研究会終了後、グリル友楽で懇親会が開かれた。

◇一二月四日(日)(午前九時三〇分—午後三時)

研究会(司会 吉田 孝氏・長山泰孝氏)

一九八八年出土木簡の概要

東大寺出土の木簡

藤原宮出土の木簡

加藤 優氏

和田 萃氏

橋本義則氏

加藤報告は、一九八八年に木簡が出土した四三箇所の遺跡について、木簡出土遺構と木簡内容の概要を報告したものである。そのうち一〇世紀以前のもは二一遺跡、他は中・近世のものであった。

和田萃氏の報告は、東大寺大仏殿廻廊外の西南の谷から出土した大仏鑄造にかかわる木簡についての報告で、鑄造事業の具体的様相に接近する内容の報告であった。橋本報告は、藤原宮南西部

分で出土した薬物関係の木簡についてのもので、一九六六年に藤原宮北辺で出土した薬物関係の木簡との関係及び、藤原宮における薬物関係の官司、薬園のあり方を解明するための手がかりを与える内容であった。

委員会報告

◇一九八八年一二月三日(土)

於奈良国立文化財研究所

総会に先立って、会務・編集の状況、総会・研究会の運営について検討が行われた、とくに長屋王家木簡の発表等のこともあり、報道機関に対する応対についても討議された。

◇一九八九年六月七日(水)

於奈良国立文化財研究所

新入会員の承認、一九八八年度の会計報告、『木簡研究』一一号の編集計画、『日本古代木簡選』(仮題)出版事業の経過報告などが行われた。また会計監査も同日行われた。

◇一九八九年一〇月二三日(月)

於奈良国立文化財研究所

新入会員の承認、一九八九年度前半の会計中間報告、研究会の内容の検討を行い、『日本古代木簡選』(仮題)の編集状況について報告があった。

※『日本古代木簡選』(仮題)の編集経過について

一九八八年度の大会の決定にもとづいて、同木簡選の編集事業がすすめられた。以下内容の概要と編集経過について報告する。

同書の内容は、日本出土の古代木簡(九世紀頃までに書かれたも

の)のうち、写真版として良好なものを選んで収録したもので、木簡の釈文・出土遺構・木簡の内容の注解を加えたものである。日本古代の木簡の全体像を概観しようとしたもので、木簡学会十周年の区切りの事業としてふさわしいものとして発案された。執筆は石上英一・今泉隆雄・加藤 優・鬼頭清明・倉住靖彦・栄原永遠男・佐藤 信・佐藤宗諄・杉本一樹・東野治之・平川 南・山中敏史・和田 萃の諸氏が出土遺構・木簡の注解等を分担した。またそれ以外に平野邦雄「木簡と古代史研究」、田中 琢「木簡と考古学」、狩野 久「木簡概論」、佐藤 信「木簡研究の歴史」の四論考を収録することになっている。編集の実務は石上英一・鬼頭清明・栄原永遠男・佐藤 信の諸氏が行い、一月現在で初校ゲラの検討を行っている。当初の予定では今年度前半に出版の予定であったが、注解や出土遺構の解説原稿の量がふくらみ、大はばに遅延することとなった。現状では来年度当初には公刊できると考えている、なお本書は岩波書店から刊行の予定である。